

6月5日の早朝、夫の後輩はホテルまで見送りに来て下さいました。前夜、彼の畑の産物を奥様が料理して下さい、タケノコ煮、梅甘露煮、ソラマメ、グリーンピースなどの信じられないほどフレッシュでおいしい野菜をいただいて、菜園を楽しむ方の醍醐味に相伴し、感謝したのです。新鮮なものは甘味がたっぷりあるのですね。名残を惜しみながら、お別れしました。



玄海和尚

次の行き先は後輩の郷里でもある杵築です。夫は6歳で大連から引き上げ、高校卒業まで杵築で育ったので、第二の故郷ですが、実質は母なる故郷かもしれません。夫が高校生の頃、青春の嵐に行きまどって、悶々としながら、安住寺で禅宗を学んでいたところ、玄海和尚が「君は教会を知っているか」と声をかけました。そこで、初めて杵築教会を訪ね、吉新牧師と出会ったのです。



吉新牧師

吉新牧師から聖書を貸してもらって、キリスト教を始めて知り、新しい道を見つけました。今回の旅行の最大の目的は、ホームに入られた吉新牧師をお見舞いすることでした。

駅には杵築教会の先輩のお姉様が待っていて下さいました。久しぶりの再会を喜び、教会へと向かいました。教会では後任の牧師、副牧師のお二人がおられました。また、付属幼稚園からは可愛い声が聞こえてきました。杵築市は「仏の里」と言われる国東半島の南の入り口、産業と言えばミカン、茶など農業が盛んな、別府湾に面した、歴史のある城下町です。大分空港がありますが、通過点で、現在は人口3万人程度の過疎の町です。この町の教会に吉新牧師は、神学校を出てすぐに赴任し、2年前に隠退されるまで、独身のまま60年余り、人生すべてを捧げて来られました。



教会は町の中心部にあり、ヴォーリス社設計による、スペイン瓦を持つ立派な会堂を持っています。パイプオルガンの響き、ステンドグラスを通して入る光の中で礼拝ができる立派な礼拝堂があります。また、カリオンも備えられています。教会図書蔵書は近隣教会のための資料庫と言っても過言ではありません。少子高齢化、過疎化の波が杵築市にも押し寄せ、教会員の方々は懸命に教会を支え、奉仕しておられます。

85歳になられた牧師をホームにお訪ねしました。牧師は両足骨折のため車椅子の生活をしておられました。牧師に「先生に導かれて牧師になりました。お世話になりました。このたび隠退いたしました」と挨拶をしますと、一言「もったいない！」とおっしゃって、これまでの労をねぎらって下さいました。ちょうど食事時間の訪問になってしまい、申し訳なかったのです。お姉様は懸命に食事を口元に運んで促されましたが、牧師はただ黙って、私たちを見つめられるばかりでした。高齢で動けなければ、脳の活性も鈍り、意識の継続も困難になるようですが、先生はホームの皆様からも、穏やかで高潔な人柄のゆえに、尊敬され、平安に過ごしておられました。

ホームを辞し、もうお一人の杵築教会のメンバーをお訪ねしました。ご夫君は「牛より強い」と言われた剛の者で、ミカン農家として杵築に入植された方ですが、昨年亡くなりました。奥様が農園を守っておられます。1時間の道のりを子どもと共に礼拝に歩いて行かれた奥様は、聖女のように可憐で、信仰に生きる純粋な童女の微笑みと屈託のなさで迎えてくれました。「お父さんが作ったピワですよ」と出されたピワはこれまで味わったことのない程甘いおいしいピワでした。